

Title	「まほし」の性格につきての一考：とくに「まくほし」との対比において
Sub Title	A study on the character of "mahoshi". : Especially with reference to "makuhoshi."
Author	武井, 睦雄(Takei, Mutsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.11, (1961. 1) ,p.33- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00110001-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00110001-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「まほし」の性格につきての一考

——とくに「まくほし」との対比において——

武 井 睦 雄

本稿において使用したテキストは左の通りである。

「古事記大成索引篇」「万葉集総索引」「竹取物語総索引」「源氏物語大成本文篇および索引篇」「紫式部日記用語索引」「和泉式部日記総索引」「更級日記総索引」「清少納言（所謂枕草子——日本古典全集本）」「古今和歌集総索引」「後撰和歌集（岩波文庫本）」「拾遺和歌集（日本古典全集本）」「伊勢物語（日本古典文学大系本）」「徒然草総索引」「下官集（国語学大系本）」「仮名文字遣（同上）」「定家卿仮名遣（同上）」以下略。

なお、用例の所在はそれぞれのテキストの記載形式に従って示すこととする。

一

「まほし」というかたちは、平安時代の仮名文学作品の中に、しばしばあらわれる。初期仮名文学作品の一例として、竹取物語をとりあげてみると、

見まほしうする

三ウ

見まほしうて

三ウ

ゆかまほしき所へいぬ

二三オ

のごとく三例ある。これに対し、奈良時代にまでさかのぼると、「まほし」の存在を示すべき確かな用例は見当らない。古事記大成案引篇によれば、「まほし」のかたちが二例挙げられているが、これらは何れも「欲」を正訓によってよんだもので、このようなものは、資料とするに足りないものである。一方、「まほし」の原形とみるべきが「まくほし」であることはいうまでもない。このかたちを確実に示すものは、

美麻久能富之伎

万葉、卷二〇、四四四九

が挙げ得る程度ではあるが、以下にあげる例において、卷字を「マク」、欲字を「ホシ」と訓むことをちゆうちよしないなら——そして、五あるいは七という歌の中の音の数との関係から見ても、当面の例において、これは自然であるが——、

懸卷欲寸

万葉、卷三、二八五

明日左倍見卷欲寸君香聞

万葉、卷六、一〇一四

守卷欲寸

万葉、卷一〇、一八五八

問卷乃欲

万葉、卷九、一七四二

など、豊富な用例がある。

以上からだけでも、「まくほし」と「まほし」とを比較するとき、前者が古く、後者が新しいということも明らかである。それでは、「まほし」が新しくおこったとき、両者はどのようななかたちで交渉を持ったであろうか。

物語文学の最高峰としてしばしば挙げられる源氏物語には、「まほし」の例は相当にあらわれている。例えば、

つねにまいらまほしく

桐壺

のちのかたみにもみまほしく

竹河

すぐさまほしくなむ

薄雲

あはれにみまほし

若紫

物思ひしらむ人にこそみせまほしけれ

明石

のごときものであるが、その例は、源氏物語大成索引篇に項目として掲げてあるものを数えても二五八例に及んでいる。けれども、その反面、「まくほし」の例は一例も見出されない。

また、同じ著者の作と考えられる紫式部日記をみると、これには、「まほし」の例は、例えば、

いはまほしく侍れど

六七頁

いと御らんぜさせまほしう侍りし文書かな

六四頁

つくらまほしう侍り

六八頁

なほ童にてあらせまほしき様を

五八頁

火影華やかにあらまほしくて

七五頁

のごとく、合計一一例あるが、「まくほし」の例は見出されない。

更に、和泉式部日記および更級日記をみても、「まほし」の例は、前者に七例、後者に六例あるが、「まくほし」の例は見出されない。枕草子でも、「まほし」は若干見られるが、「まくほし」の例は見当らない。すでに挙げた竹取物語でも、「まほし」三例に対し、「まくほし」は見えない。ただ、伊勢物語では、「まほし」の例はなく、「まくほし」が、

いたづらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさに誘はれつゝ

第六五段

ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに

第七一段

老ぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

第八四段

のごとく三例ある。

以上のごとく、物語、日記、隨筆の類を見て来ると、伊勢物語に於ける例を除けば、これらには「まくほし」は用いられていないことになる。そこで、伊勢物語に於ける三例に他と區別せらるべき性質があるかを見ると、上の引用によってすでに明らかかなように、これらが歌の中に用いられていることが知られる。(なお、源氏物語のみは、「まほし」の例二五八例中の一例だけが歌の中に用いられている。)

それでは、両者の相違を、歌に用いられるか——いわゆる歌語か——否かという点で區別してよいか、ということが問題となる。

右に挙げた諸文献とはほぼ同時代に編まれた歌集として、三代集の例を調べてみよう。(個々の歌が作られたのは撰進年代より若干遡られることはいうまでもない。古歌が収録されている場合があるので、作者の名をも併せて掲げることとした。なお、「しらず」とあるのは、「(詠み人) しらず」と明記してあるもの、および、作者名の記載のないものである。)

古今和歌集には、「まほし」の用例は一例も見出されない。そして、「まくほし」の例は、

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいざなはれつゝ 六二〇

みても又またも見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり 七五二

老ぬればさらぬ別れも有といへばいよいよ見まくほしき君哉 業平の母 九〇〇

わたの原よせくる波のしばくも見まくのほしき玉津嶋かも 九二二

あひみまくほしはかすなく有ながら人につきなみまどひこそすれ きのありとも 一〇二九

の五例である。(すでに掲げたように、第一首目の歌と同じもの、および、第三首目の歌とほとんど同じものが伊勢物語にも収められている。)

次に後撰和歌集をみると、「まくほし」は、

よそにのみまつぞかひなき住の江の行きてさへこそみまくほしけれ 延喜御製 六五四

別れつるほどもへなく白浪の立ち帰りてもみまくほしきか つらゆき 七三一

うちかへしみまくぞほしき古里のやまと撫子色やかはれる  
の三例であり、これに対し「まほし」は、

身をわけてあらまほしくぞおもほゆる人を苦しといひけるものを

行く方もなくせかれたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな

つらくともあらむとぞ思ふよそにても人やけぬると聞かまほしさに

跡みれば心なくさの涙千鳥いまは声こそ聞かまほしけれ

あしびきの山に生ふてふもろかづらもろともにこそ入らまほしけれ

ほのみても目なれにけりと聞くからに臥しかへりこそしなまほしけれ

引き眉のかくふたごもりせまほしみ桑こきたれて泣くをみせばや

かり人のたづぬる鹿はいなひ野にあはでのみこそあらまほしけれ

白河の滝のいと見まほしけれどみだりに人はよせじものをや

宮人とならまほしきを女郎花野辺よりきりの立ちいでゝぞくる

の一〇例があらわれている。

最後に拾遺和歌集をみると、「まくほし」は、

別れ路は恋しき人の文ふみなれや遣らでのみこそ見まく欲しけれ

恋ひ死なん後は何せん生ける日のためこそ人は見まく欲しけれ

三日月のさやかに見えす雲隠れ見まくぞ欲しき憂たて此頃

雪を薄うすみ垣根に摘めるから齋さい親おや昵ねさはまくの欲しき君かな

の四例であり、これに対し「まほし」は、

散り散らず聞かまほしきを故郷ふるさとの花見て帰る人も逢はなん

しらず 七九七

しらず 五七六

しらず 五九一

しらず 六二八

しらず 六三六

しらず 六九五

しらず 八五八

忠房朝臣 八七五

しらず 一〇一〇

中務 一〇八八

しらず 一二〇〇

しらず 四五頁

大伴百世 九八頁

人麻呂 一一〇頁

藤原長能 一三七頁

伊勢 九頁

初声の聞かまほしさに杜鵑夜深く目をも覚しつるかな

しらず 一五頁

行きやらで山路暮しつほとときす今一声の聞かまほしさに

源、公忠朝臣 一七頁

別れ路を隔つる雲の為にこそ扇の風を遣らまほしけれ

能宣 四五頁

君が来る宿に絶えせぬ蒲の糸は経て見まほしき物にぞ有りける

中務 六三頁

逢ふ事の片飼したる陸奥の来まほしくのみ思はゆるかな

しらず 一二四頁

春は惜し杜鵑はた聞かまほし思ひ煩ふ静心かな

元輔 一四三頁

心ありて問ふには有らず世の中に有りや無しやの聞かまほしきぞ

しらず 一六三頁

の八例である。

以上の諸例を通覧すると、古今和歌集の時代には、「まくほし」は歌語ないし雅語と考えられ、一方、「まほし」は、当代人の意識として、俗語的色彩を持つもの——歌などによむには適しないもの——と考えられていたと解せられるのではなからうか。そして、その發生に於いて俗語的であった「まほし」は、時がたつにつれ、そのいわば社会的地位を徐々に向上させて行つた、という点が認められる。古語である「まくほし」が普通には次第に用いられなくなつて、一般に守旧的な歌の世界にのみその使用が限定されて行き、遂には、語としての生命を失つて行つたということは十分考え得ることであろう。また、特殊な用法として、歌の中でも特に、音節の数を整える必要の生じた際に「まくほし」が好んで用いられた点も考えられる。すなわち、具体的には、「見る」に附せられる場合、一方に「見まほしけれと」(後撰、一〇八八)「(経て)見まほしき」(拾遺、六三頁)があり、他方に「見まくほしけれ」(後撰、六五四。拾遺、四五頁、九八頁)「見まくぞほしき」(後撰、七九七。拾遺、一一〇頁)「見まくほしきか」(後撰、七三一)があることから、音の数をととのえる上で、両者を使い分けていたという点が見られるのである。

けれども、「まくほし」の例の作者に、人麻呂(拾遺)、醍醐帝(延喜御製)、つらゆき(以上後撰)のごとき名が見えていることは、やはりそれ相應の意味があるように思われる。まず人麻呂の歌については、万葉集巻一一に、

若月清不見雲隠見欲字多手比日

二四六四

という歌のあることが思い出される。これは作者名の記されていないものであるが、それが作者の明らかでないままに古歌として伝えられて来た時、当代に於いてもすぐれた歌と認められ、このような歌の作者は、歌聖といわれる人麻呂であろうと考えられ、人麻呂作という名のもとに、この歌集に収録されたものではなからうか。ちなみに、校本万葉集によれば、類聚古集では本文の下に小字で「人丸集」とある。そうすれば、かりに人麻呂の作でなかったとしても、それが人麻呂作として当代人に把握されていたところ、更に大きな意味を見出すことができよう。そう考えて来ると、醍醐帝、つらゆきの場合は、かれらがこれらの歌集の編纂時より一時代前に生きた人であるという点がまず考えられ、また、それらがその作者の作ではなかったとしても、後撰、拾遺時代の人には、他の歌の場合と同様に、あるいは古歌として、あるいは作風の上に一種の古めかしさを出そうとした、いわばスタイルの問題として受け取られたと解釈され得るであろう。(補記参照)

「まくほし」というかたちが、その時代の口語的(ないし口語文的)表現としては、廃滅してしまおうと、その瞬間、「まほし」は俗語としての地位から解放されることとなる。そして、そのような時期が、右に掲げた後撰、拾遺両和歌集所載の歌の作られた時期と重なるのではなからうか。(なお、国語史の資料として時に重用される訓点資料には、「まくほし」および「まほし」のかたちはともに見出されないの、これはこの際意味を持たない。ただ、このことはこれらが行われるべき一つの場を示すものと云い得よう。)

「まほし」の生命は、しかし、さして長いものではなかったと思われる。徒然草のごとき、いわゆる擬古文——平安時代の仮名文の物語にとられている文体を模倣しようとした文——に於いて、このかたちがあらわれるのは、おそらくは上品ないまわしとして、それが取り入れられているためであろう。もとより、ほかにも後の時代の文章で、われわれの目に触れることは少なくなく、例えば、徒然草ほどの擬古文体に於いてではなくとも、

見に行かまほしけれど

宇治拾遺

もつともかうこそあらまほしけれ

平家物語

のごとき例があるけれども、やはり、これらは中世以降の口語的表現とは受け取りがたいものと思う。それ故、「まほし」が、その時



代の生きたことばとして用いられたのは、割合に短い期間に過ぎなかったのではあるまいか。以下筆者としては、その線で考えてみた。  
い。

更に時代の下った資料として、キリシタン文献たるロドリゲス日本大文典の中にも、この「まほし」の崩れたかたちと思われる「mafokji」が散見される。《まほし↓まほしい》の変化は、当代に於いてすでに、用言の連体形がその終止形を蚕食した結果と見得るものであるから、その点では、この「まほし」のかたちが当代になお生き残っていたかの様相を呈する。ところで、本書では、「話しことばや日常の会話における文体と文書や書物や書状の文体とは全く別であって、云い廻しなり動詞の語尾なり、その中に用ゐられる助辭なりがたがひに甚だしく相違している」点を指摘しており（土井忠生氏訳、日本大文典序文）、それに続く部分で、「本文典の論述に於いても、話しことばではかくかく用ゐる、書きことばではかくかく用ゐると説いた」と記している。（しかし、実際には、両者の別を明記していない場合がまま見られる。）すなわち、著者は日本語に於ける文語および口語の別を認め、その両者につき論述をすすめていると解せられる。

さて、本書では希求の用法の項に「……がな」「……たい」を挙げていながら、「まほしい」は挙げられていない。また、同じ著者による小文典の方では「まほし（い）」について触れていない。その上、大文典三五二頁の記述では、平安時代にすでに古語的なものとなっていたと考えられる「まくほし（い）」のかたちと同列に取り扱っている。

以上の諸点から、「まほし（い）」は「まくほし（い）」とともに、ロドリゲスにあっても、彼のいわゆる「書きことば」すなわち古語意識に支えられた文章語的なものと把握されていたものと解することができよう。そして、彼がかく解するについては、そう解すべき当代一般の風潮が、それを支えるべきものとして、あったものと考えられる。

一一

奈良時代には、「まく」と「ほし」とが結合するのに特別な関係があるわけではなかった。すなわち、

知良麻久怨之美

万葉、卷五、八四二

見卷<sup>ミマク</sup>吉流<sup>キリウ</sup>思母<sup>シモ</sup>

解卷<sup>トキマク</sup>借毛<sup>カケモ</sup>

班<sup>ヒラ</sup>衣服<sup>イフク</sup>欲香<sup>ヨクカウ</sup>

恠<sup>イナシク</sup>殊<sup>シ</sup>欲服<sup>ヨクフク</sup>

万葉、卷二、三二九

万葉、卷二二、二九五—

万葉、卷七、一二六〇

万葉、卷七、一三二四

のごとく、「まく」は「ほし」以外の語と、「ほし」は「まく」以外の語と、自由に結びつくものであった。

時代が下ってから、一種の慣用表現として、「まくほし」として用いられる例は相当に多くなっている。それでも、「……まくのほしき……」「……まくがほし」のごとく、「まく」と「ほし」とを切りはなして用いる用法も見られる。また、さきに掲げた三代集の中の例を見ても、五、七、……のごとく、歌として五音ないし七音に分けると、「まくほし」が二つの句にまたがっている場合があり、その際にはその切れ目は「まく」と「ほし」との間におかれている。もとより、「まく」と「ほし」とを切りはなさないで、「まくほし」を一語と解するがごとき説はこんにち見当らず、これは△助動詞「む」の未然形「ま」十九行延言の「く」△形容詞「ほし」△と解されているものと思われる。けれども、これに対し「まほし」はこんにち一般に一語として、助動詞と解する見方が強いようである。(ただし、広日本文典は、助動詞「む」が延言により「まく」となり、「まくほし」の「く」が落ちて「まほし」のかたちが生じたと「む」の項(第二四九節)で説き、助動詞ないし一つの品詞として「まほし」を挙げてはいない。

「まほし」は、その成立から見ると、「まくほし」に由来すると考えられる。すなわち、「まくほし」の「く」が——その脱落の過程および原因は本稿の主題に属さず当面の問題ではない——脱落して、「まほし」となったと考えられる。そして、そうなるためには、「まく」は「ほし」以外の語に対するのと異なり「ほし」と、また、「ほし」は「まく」以外の語に対するのと異なり「まく」と、強い結びつき——一種の慣用表現としての——を持っていたと考えられ、「く」の脱落を契機として、その結びつきは一層緊密になったであろうことは疑いない。

古今和歌集に於いては、「まく」が「ほし」以外の語に続いてある例は、

おもふどちまとのせる夜は唐錦たまくおしき物にぞ有ける しらず 八六四

いざこゝに我世はへなむすがはらや伏見の里のあれまくもおし 　しらす 　九八一

の二例、そして、「ほし」が「まく」とは別に用いられている例は、

葦引の山田のそほづをのれさへ我をほしてふうれはしきこと 　しらす 　一〇二七

の一例である。「ほし」はたまたま一例しかでてこないが、「ほし」の方は、このように「……を・ほし」というかたちでは、自由な使い方をされたものと見られよう。そして、右の事実は、すでに「まく」と「ほし」とが互いに、他の語との結びつきの場合とは異なる、強い結びつきを——つまり、「まくほし」として——持っていたことを示していることと見ることができよう。

そもそも、二語がいわば複合して生まれた一語と、慣用的に強い結合関係をもって用いられている二語との境界線は、むしろ一般には明確に引き難い。当代人の意識として——それがその時代のことばとして、生きていた際に——「まほし」はどのように把握されたであろうか。

前に掲げた諸文献の例が、その成立の当時、どのように表記されていたかをうかがうべき一つの材料として、源氏物語大成索引篇の「まほし」の項に挙げられている二五八例の表記を、同大成本文篇によりその底本たる青表紙本について調べてみると、その用例すべてが「まほし（および、その活用したかたち——以下省略）」とされている。（凡例によれば、その仮名遣いは原本の通りとされている。ただし、諸本との校異については右の大成本では仮名遣いの相違を掲げていないから、諸本との異同を見ることはできない。）その一部が定家筆と伝えられるこの本文は一種の仮名遣いを規範として守っていたかもしれないから、これはそのまま資料として第一等のそれとは云い得ないかもしれない。けれども、全用例が例外なく「まほし」と記され、また、他方、いわゆる定家仮名遣の書たる、下官集、仮名文字遣、および、定家卿仮名遣の三書による限り、「まほし」は仮名遣いの上で問題にされていない点を考えあわせると、「まほし」に関しては表記を誤るおそれがなかったものと解することができよう。すなわち、この時代には、いわゆるへ行転呼の現象が起こって、語中語尾（換言すれば語頭以外）のへ行音はすべてワ行音となったとされているが、右の事実から、「まほし」は音として「マオシ」にはならなかったらうと推定され得るのではあるまいか。（もっとも、例えは「まほ（真帆）」「かたほ（片帆）」のごとく、複合

してできた名詞の各部分が、一語としての中で、なお、それぞれの意味を保持している場合、やはり、ハ行転呼の現象は及ばないが、ただちにこれと右とを同じに扱うことを以上は意味しないこと、いうまでもない。

また、後撰和歌集中の「いはまほしく」の例(五九一)は「云はまほし」と「岩間ほし」とを、そして、拾遺和歌集中の「来まほしく」の例(古典全集本一四四頁)は「来まほし」と「駒ほし」とを、それぞれかけた例であるが、このようにかかけ得たということも小さなことながら見逃しが見たい事実であるということができよう。

その発生に於いて「マホシ」であった「まほし」は、右の諸点、および、前述のごとくロドリゲス日本大文典に「mafosi」のかたち掲げられている点を考えあわせると、「マオシ」にはならなかったと解せられる。そして、「まほし」がずっと「マホシ」であって「マオシ」ではなかったとすれば、われわれはそのことにひとつの意味を見出してよいのではあるまいか。すなわち、ハ行転呼の現象はそれぞれの語に於いて、その語頭以外にあらわれたと考えられるから、「まほし」が「マホシ」であったとすれば、それは当代人にとって一語ではなく、すくなくとも一語的ではなく、「ま」と「ほし」との二つの要素ないしは項の結合したものと意識されたということになる。

また、後撰和歌集中の「見まほしけれど」の例(二〇八八)は、

しらかはの・たきのいとみま・ほしけれど……

のごとく区切られるものであり、このことは「まほし」が右のように両分され得べきものであったことを示す一つの証左となるものであろう。

「まほし」が一語と解される場合、それは未然形接続で希望をあらわす助動詞ととられ、その活用形は、

まほしく　まほしく　まほし　まほしき　まほしけれ

とされるのが普通のようなのである。

これは、あるいは当然のことながら、各活用形から「ま」を取り去れば、「欲する」の意をあらわす形容詞「ほし」の活用と全く一

致する。そして、この「ま」は、「まほし」の「ま」が一般に未来の助動詞「む」の未然形と解されていることから、それと同様に、「む」の未然形と解し得ることは明らかである。

ひとが或ることを欲する場合、その欲せられる対象は未来のことであるのが自然である。そうすれば、「ま」＋「ほし」は「……であらうことを欲する」という意味を持つと考えられ、これは、結局、一般の文法書に挙げられている助動詞「まほし」の用法と同じことになり、また、同時に、おのおの用例を十分説明し得るものと考えられる。

文法上の分類には、詮ずるところ、各人の解釈が入って来る。従って、「ま」＋「ほし」として助動詞「まほし」を認めぬことはそれ自体正しく、他の区分が誤りであるとは云い得ぬこと、いうまでもない。

ことに、この場合「む」がその未然形から用言に接続するという、いわば例外が作られることになるから、そして、また、「ま」に「ほし」が接続したかたち——すなわち「まほし」——の用例は相当に多いから、今日的視野に於いて、教育を目的としての文法の記述の際、助動詞「まほし」を一つの語として措定することは、それそのこととして、意味があるとは考えられる。

しかし、平安時代人の意識を根柢において考察する時、それぞれに意味を持つ単位として、「ま」と「ほし」とが独立した地位を占めていたと解せられることは以上により明らかであろう。

なお、「まほし」と逆の意味を持つかたちに、

このきみの御わらはすかたいとかへまうくおほせと

源氏、桐壺

たた人にてはあたらしくみせまうき御さまを

源氏、紅梅

かすならぬ身をみまうくおほしすてむ

源氏、葵

のごとく、その用例はさして多くないにせよ、「まうし」がある。これは、同様に、「ま」と「うし(憂し)」とにわけることができよう。ちなみに、助動詞「まうし」をたてる文法書の例は、いまだ僅かしか管見に入らない。もっとも、「まうし」の場合、これを特に

助動詞の一としてたてるとしても、その実用的価値は如何なものであろうか。

なお、方法論的にいえば、筆者は、問題を主として共時論的な視野においてとらえたものであるが、亀井孝先生は、「まほし」の廃滅を歴史的すなわち通時論的な視野において考えておられたよしであつて、先生によれば、「まほし」の生命の弱かつたこと自体が、「まほし」の「マオシ」でなく「マホシ」であつたところにあると解しておられるとのことである。そして、他方、もし「まほし」がその合成をかたくして音韻の面で「マオシ」の形にならうとするときは、意味の上で反対の「まうし」との衝突のおこる危険があるという不都合が、また「マホシ」を孤立させることになつたとみられるのではないかとのことであつた。もつとも、これは、一旦、「まうし」が成立した段階ではなして、「まうし」自体の発生は、「ま・ほし」に対する類推にもとづくもので、△ま・くうし↓「まうし」▽の過程を経たものではなからうとのことである。この御説によれば、他方、「ま・うし」を間接的なてがかりとして、「まほし」は、やはり、「ま・ほし」すなわち「ま」と「ほし」とに分析されていたことになり得る。

〔補記〕拾遺和歌集に於ける大伴、百世の歌については、万葉集卷四に、孤悲死牟後者何為牟生日之為社妹乎欲見為礼 五六〇

という類歌がある。